春の読書課題

北海道大学経済学部経済学科 2 年
学生番号：01135026
豊島由里子

１．『月と六ペンス』

私が普段読む本は専ら現代日本文学であり、名作として伝えられている日本文学や海外文学を私的に読むことはまずない。課題として読んだ本ではあるが、二十歳になって今更ではあるがこの作品を読んで“名作”の魅力に触れることができた。そして今まで読まず嫌いで避けてきた態度を反省した。

『月と六ペンス』には心に刺さるような文章がいくつも出てくる。中でも私が気に入っている文章は物語の序盤、突然姿を消したストリックランドに会いに「私」がパリへ向かう時に出てくる。

「人間性がいかに矛盾したものかを当時の私はまだ知らず、見栄など醜いだけのものと思っていた。誠実さにどれだけのポーズが含まれ、高貴にどれだけの野卑が含まれ、自堕落にどれだけの善良さが含まれているかを、私はまだ知らなかった。」（p, 71）

この部分は、その後に登場するあらゆる人物に共通する点であり、そして当然今を生きる我々にも共通する点である。鋭い観察眼を持ちながらも凡庸な絵しか描けないストルーブ。ストリックランドに強い嫌悪感を抱きながらも、結果的に夫を捨ててストリックランドについていくストルーブ夫人。そしてある日突然家族を捨ててパリに向かい絵描きとなるストリックランド。ストリックランドは特に矛盾に満ち溢れていて“変人”として扱われていて、作家である“私”を魅了している。確かにストリックランドは変人であるがストリックランドの周りにいる人々は皆“変人”なのだろうか。ストリックランド夫人、ストルーブ、ストルーブ夫人、アタは皆“変人”なのだろうか。少なくとも私は何度かこの作品を読み返すことにより、ストリックランド以外のほとんどの登場人物に、ある種の共感を抱いた。そしてストリックランド以外の登場人物に共感することにより、理解不能としか思えなかったストリックランドの行動にも少しずつ共感できるようになった。

物語の終盤に進むにつれてストリックランドは次第に“原始的”になっていく。どんなに作家である“私”がストリックランドにある種の憧れを抱いていたとしても、モームは読者に「原始的な生活に戻れ、本能のままに生活しろ」とは言っていない。今の社会を窮屈に感じた私がそこから抜け出したいと思い、本能のままに生きることは不可能ではない

のかもしれない。しかしストリックランドの生涯をみている限り、本能のままに生きたからといって、窮屈に感じていた社会で生きていた頃よりも幸せだったようには思えない。本能のままに生きた人生とそうじゃない人生があるだけで、どちらのほうが幸せであるとか正しいとか、そういうものはないのではないかと思った

２.『若きウェルテルの悩み』

表表紙には次のように書かれてある。『詩人は「もし生涯に『ウェルテル』が自分のために書かれたと感じるような時期がないなら,その人は不幸だ」と語った』と。私には『ウェルテル』が自分のために書かれたと感じることが出来るだろうか。結果として、最初に読了時に抱いた感情はウェルテルに対する強い嫌悪感であった。

この作品には、“うじうじした男性”の心の叫びが書かれている。私が女性だからだろうか。女性が抱く男性にはこうあってほしいという世間の理想像からウェルテルは大きくかけ離れている。だから男性のこのような面から目を逸らしたい。しかし、ウェルテルに対していくら強い嫌悪を感じたからといって、この作品が“名作”として受け継がれる理由にはならない。そして「もし生涯に『ウェルテル』が自分のために書かれたと感じるような時期がないなら、その人は不幸だ」と詩人に言わせないだろう。

読み直していくにつれて、私はウェルテルに強い嫌悪を抱き続けながらも、ウェルテルに対する共感も得られるようになった。性別は関係なかったようだ。中でも作品の終盤でウェルテルが愛するロッテの婚約者アルベルトと自殺を巡る見解について口論をする場面がある。この場面において初めて私はウェルテルの主張に賛同することができた。

この作品はよく「青春が放つエネルギーを自己の内面にしか向けられない青年の苦悩」を描いた作品として紹介されているが、わたしはいまいち、その紹介の仕方にはピンと来ない。ウェルテルの悩みは青春時代にしか存在しないものなのか。ロッテに対する叶うことのない恋愛感情というフィルターでみれば、ウェルテルの悩みは特に女性に取っては嫌悪感しか抱けないのではないのではないか。ウェルテルのいじいじとした様子とそしてこの作品が名作として受け継がれて評価されていることは、世間がウェルテルを肯定していると取れて、私は少しばかり反発してしまう。しかしウェルテルの悩みから恋愛というフィルターを抜いたらどうだろうか。正論ばかりじゃどうにもならない世の中に苦悩する一人の青年の書簡として読み直せば、ウェルテルがなにを考えているのか、何故この作品が名作として評価され続けているのか少しだけ分かった気がする。

３.『風土－人間学的考察―』和辻哲郎

最初に『風土』に触れたのは高校時代のことである。倫理の先生が『風土』を取り上げた授業は、作品の内容の斬新さに衝撃を受け、とても印象的なものとして記憶に残っている。牧場型の合理的思考、沙漠型の戦闘的思考、モンスーン型の忍従的思考。どれも確かになるほど、と感じるものである。しかしあまりにも反論が難しいからだろうか、章が進むにつれて、流石にそれはこじつけではないのかと疑いたくなる程である。

第３章、モンスーン的風土の特殊形態では日本の風土と日本人の関係に言及されている。第２章でモンスーン的風土に関する文章のなかで日本には当てはまらないと感じていた違和感をこの章では見事に解決してくれている。特に日本人はモンスーン的受容性を持ちつつも調子の早い移り変わりを要求し、それによりもたらされた疲労は無刺激的な休養によって癒されるのではなく、新しい刺激・気分等の感情の変化によって癒されるという指摘には衝撃を受けた。おっとりしていながらも常に働き続けているようなイメージがある日本人にはぴったりとあてはまる表現である。

内容そのものとはほとんど関係ないが、私は和辻哲郎の書く文章の美しさに惹かれた。高校時代の授業でこの作品の内容を取り上げた時に衝撃を受けたが、すぐに原書にあたろうとは思わなかった。内容を事前に知っていたこともあるが、ともかく原書をすぐに当らなかったことを少し後悔した。和辻哲郎の書く植物、風景、“風土”は今目の前にすぐあるようなリアリティがある。そしてそれが本全体の説得力に繋がっている。私は海外にはほとんど行ったことがない。牧場型、沙漠型の風土もそこに暮らす人々の特徴もわからない。だから正直、日本以外について言及している場面は納得感というものはあまり感じられなかった。しかし「多分そうなのだろうな」と読者に思わせる力強さが文章から感じられるのだ。

先程は章が進むにつれて和辻の指摘がこじつけのように感じると書いた。それはもちろん私が風土学という学問に関する知識があまりにも乏しいことが理由としてあげられる。しかしこじつけ・理由の後付けのように感じるからといって和辻の指摘が誤りであるという根拠にはならない。むしろ最初はこじつけであっても、そこから始まる学問は多いのではないかと感じた。